

## 三島リサーチ、終了

ーそしてはじまる「三宅島大学誌」ー

二〇一四年七月二十三日。「三宅島大学」閉校式から四ヶ月、夜の竹芝客船ターミナルに、六名が集合した。慶應義塾大学環境情報学部・加藤文俊教授、その研究室の卒業生であり三宅島大学プロジェクトの初期からのメンバーである飯田さんと森部さん、現役生としてプロジェクト後半を支えた深澤さん、三宅島大学マネージャーかつ三宅村役場の職員として島に滞在しながらプロジェクトに携わった吉田さん。わたし自身は三宅島大学の運営側ではないものの、加藤文俊研究室の卒業生として、閉校式とその翌年に三宅島を訪れ、プロジェクトに参加していた。

竹芝での合流後はもちろん船に乗る

わけだが、今回の最初の目的地は、三

宅島ではない。そこからさらに四時間弱船に揺られた先にある、八丈島だ。

メンバーは八丈島・三宅島・大島の順

に渡つてリサーチを行い、二十七日夜

に竹芝へと戻った。各島での滞在は、

それぞれ二十四時間強。文字通りの弾

丸ツアード。

そして三宅島大学プロジェクトの中 心にいなかつた自分として、メンバーの中にある「三宅島」の存在の大きさに触れ、驚きと感慨を覚えたことも付

この三島をまたがるリサーチは、「三宅島大学誌」編纂プロジェクトの一環として実施されたものである。それは「三宅島大学」の約三年間の歴史をふり返り、地域と人びとの関わり方や場づくりの可能性と限界について考察する試みだ。三宅島大学を見つめなおすための新たな視点として、伊豆諸島のほかの島々のことを知りたくなつたのだ。



(奥麻実子)

大島から、今回四度目となる最後の船に乗つた。西日射す湿つたデッキで乾杯し、カップラーメンをすりながら、六人で話した。三宅島大学とは何だったのか、ぼんやりとしていたその輪郭が、ほんのすこし見えてきたような気がした。

三宅島の滞在目的は、ポスター制作でお世話をうかがつた。三宅島大学でお世話になつた女将さんに会いに行つて、三宅島大学で制作した全てのポスターをまとめたポスター集を渡すこと。

一日という短い時間の中で、すべて直接届けに行く。それぞれのポスターを見るたびに、女将さんと話した内容や、その時の表情までもが思い出せる。それほど私自身の中でもインパクトの強いものであつたのだと改めて実感した。

女将さんに会つて、ポスター集を一緒に見ながら話をする。「最初は三宅島大学つていうのが何なのかよくわかるなかつた」と私たちが島へ出入りを始めた当時を振り返りながらしてきた。今だから聞けたものだつた。何度も通つて、顔を合わせて、くうちに交わ

る。「もう少し続けばいいのに」「これからなのに」という言葉をもらうと、いつも同じ方向を向いて歩んできていたのだと心強くなつた。応援してくれた人たちがいることは、自分たちの活動の原動力になる。三宅島大学は今、島の中では拠点も活動も停止してしまつてゐるけれど、確実にそのなかで育まれてきたものの足跡が残つている。思いや変化も含めてこの一年をかけて、三年間の三宅島大学をいねいにたどつてまとめていきたい。

(森部綾子)



2014年  
(平成26年)  
7月30日  
水曜日

あしたばん編集部  
発行所: 加藤文俊研究室  
info@ashitaban.net  
http://ashitaban.net/

第五十一号

足跡をたどる



YASUTATSU SUTAYA & CO.

「八丈島には TSUTAYA やコンビニがあるらしい」。三宅島に一年間住んでいたから、隣島である八丈島に行つたことがない私に届く八丈島の情報は、利便性が高く、都会的な生活ができる場所であることを感じさせるものだった。竹芝桟橋から八丈島へ向かう橋の甲板で生温い潮風を浴びながら、そんな話を思い出しては初めて踏み入れる八丈島に妄想を膨らませていった。



港船客待合所で島内の情報を集めることにした。そこで目にする様々なかチラシやパンフレットを手に、予約しておいたレンタカーに乗って、中

八丈島にはT S U T A Y A もコンビニもなく、橋丸での妄想はあつきり崩れ落ちたものの、代わりに三宅島と八丈島の共通点を見ることができた。でも、私はまだまだ八丈島を知らない。橋丸に乗つてまた八丈島を知りに来なければ。

## 潮風と汗

(吉田武司)

「島」と聞くと、どこか遠い異国のことのように思える。同じ日本でありますのに、なんとも不思議だ。けれども伊豆大島は東京の竹芝からジエット船に乗れば約一時間四十五分で着いてしま

さに、驚いた。車で島を巡ると、弧状に描くような島の外形と水平線が視界に広がる海沿いの周回道路を走つて、山際は、島にいることを実感するが、山寄りの道では、東京から少し離れた感じで、外地に似た風景で、この場所が本土であつても違和感はないよう感じた。真っすぐな道路や、ふと目に留まつたマーベットが、そつさせたのかもしれない。到着した日の夜には、元町港のすぐ近くにある観光協会裏の駐車場で夏祭りが執り行われることだったので、足を運んだ。霧が少しかかり、國



深澤  
匠

一ヶ月！ みたってから乗るに就航から。 橋丸が走るのが「橋丸」だ。新しい船を心待ちにし、すでに乗船したひともいることだろう。二〇一四年六月二十七日に就航してからまだ一ヶ月ほどの橋丸で、竹芝→大島→八丈島→三宅島間を移動した。しかも大島を経由する航路は、この夏だけの特別なルートだ。やはり最初に見て印象に残ったのは、その特徴的なカラーリングだ。入港してくるのが一目でわかるほど、海に強烈に浮かび上がっていた。船内はいたるところがきれいで新品の独特なおいがし、静かで揺れも少なく感じた。普段なら出航後は甲板に出ても人影はまばらなのに、いつもよりカメラを構えているひとが多かった。船体が新しいだけで何となく新鮮な気持ちで、船から見える外の景色までも写真に収めてしまうのが不思議だ。

訪れた先々でも、自然と橋丸の話題が上がった。記念だからと就航初日に乗ったひとや、すでに四度も乗船してなおまだ乗り足りない（！）というひとなど、話を聞くと色々な声が上がった。そもそも島民からの期待が込められている証拠なのだろう。

今後、島に渡るときには橋丸に乗ることになる。徐々に使い込まれて「いつも通り」の存在になっていくのが楽しみだ。